

独立行政法人海技教育機構
海技大学校

平成 1 9 年度
研究報告書

平成 2 0 年 7 月
海技大学校
研究管理委員会

〒 659-0026 兵庫県芦屋市西蔵町 12-24
TEL: 0797-22-9341(代表)
e-mail: soumu@mail.mtc.ac.jp
<http://www.mtc.ac.jp>

平成19年度 研究管理委員会委員

委員長 藤谷達也

航海科 北川哲男

川崎真人

機関科 池西憲治

藤栄嘉隆

学務課 加治屋敦史

平成20年度 研究管理委員会委員

委員長 藤谷達也

航海科 田口幸雄

川崎真人

機関科 伊丹良治

藤栄嘉隆

学務課 加治屋敦史

1. 序章

本報告書は「独立行政法人海技大学校(以下、海技大学校とする)研究業務規程第 5 条」に基づき、各研究テーマの代表者が理事長に提出した研究報告書をもとに、研究管理委員会が「海技大学校研究管理委員会規程第 2 条(6)」の規程により取りまとめたものである。なお、研究テーマごとに代表者が理事長に提出した上記の研究報告書の中で、「海技大学校研究業務評価要領」に基づく研究担当者本人の自己評価及び教室評価が含まれている。この自己評価及び教室評価に加えて全体評価を研究管理委員会が行った。これらの評価の後、本報告書は教員会議及び幹部会の審議を経て承認されたものである。

2. 平成19年度研究業務の報告

2.1 実施研究テーマ

年度当初に研究者から提出された「教官研究テーマ申請書」に基づき承認された研究テーマは、表-1 に示す17件であった。教官研究テーマの申請書には、研究の目的、研究の概要、研究の実施項目及び方法、期待される効果、必要経費、成果の発表予定等の記載を求めた。

いずれも、「船舶の運航に関する高度の技術及び技能並びに船員の教育に関する研究を行う」ものとする海技大学校業務方法書の研究業務の目的に添ったものになっている。

表-1 平成19年度海技大学校教官研究テーマ一覧表

研究番号	科	研究テーマ名	分類	代表者	終了・継続
A06-001	N	船舶運航におけるOJTに関する研究	重点研究	航海科長	継続
A06-002	E	SMS・ETM船員教育訓練の研究	重点研究	機関科長	継続
05-004-2	E	船用機関士の手続き的知識獲得に関する研究	E	池西憲治	終了
05-005-2	E	船用機関士に対する効果的なチーム訓練方法に関する研究	E	近藤宏一	終了
06-001	N	GPSマルチパス波を応用した計測に関する研究	A	奥田成幸	継続
06-002	N	救命いかだのぎ装品の有効性に関する実験的研究	C	山本一誠	継続
06-003	E	LNG船の水処理システムの研究	B	伊丹良治	継続
06-006	E	船用クレーンのケーブル配置に関する研究	B	前田潔	継続
06-008	E	将来の日本海事教育システムについての研究	E	引間俊雄	継続
06-009	N	英語を学習する船員の国際性と多文化性の教育に関する研究	EFG	田中賢司	継続
07-001-1	N	船舶接岸速度計の性能要件に関する研究	A	新井康夫	新規
07-002-1	E	自動ボイラ制御の教育訓練用補助ボイラシミュレータの研究	E	伊丹良治	新規
07-003-1	N	操船におけるAIS情報の活用に関する研究	A	堀晶彦	新規
07-004-1	E	閉水域における船舶運航に係わる海洋環境に関する研究	D	藤谷達也	新規
07-005-1	E	ディーゼル主機遠隔操縦シミュレータを用いた訓練手法の研究	E	佐藤圭司	新規
07-006-1	N	海難の統計的特性に基づく事故評価に関する基礎研究-	C	長畑司	新規
07-007-1	E	船舶管理システムの効果的教育手法の研究	E	城戸八郎	新規

2.2 外部資金による産学連携研究

研究分野における海技大学校と海事産業界との連携・協力は資金の面も含めて、今後ますます発展させる必要がある。本校では外部資金導入による受託研究及び共同研究を積極的に推進している。

19年度は次の受託研究3件、共同研究1件が行われた。

【受託研究】

研究題目：超音波プローブによる画像ソフトの開発

研究担当者：航海科 新井康夫教授

期間：平成19年5月20日～平成20年3月31日

受託先：日本測器株式会社 株式会社神戸工業試験場

経費：¥ 525,000

研究題目：マイクロアクチュエータスキャニングソナーの開発

研究担当者：航海科 新井康夫教授

受託先：株式会社神戸工業試験場

期間：平成19年12月19日～平成20年3月30日

経費：¥ 1,890,000

研究題目：船舶自動識別装置（AIS）の信頼性向上のための調査研究

研究担当者：航海科 新井康夫教授、堀晶彦教授、奥田成幸教授、藤江晋平助教授

受託先：国土交通省海事局

期間：平成20年1月16日～平成20年3月28日

経費：¥ 2,417,746

【共同研究】

研究題目：多視点での視界再現機構の基礎的研究

主研究担当者：航海科 新井康夫教授

共同研究機関：(株)海洋総合技研

期間：平成18年6月20日～平成20年3月末日

経費：¥ 750,000

表 - 2 に 19 年度までの研究に関する外部資金獲得状況を示す。

表 - 2 外部資金獲得状況

	研究題目	連携先	契約金額
平成19年度	超音波プローブによる画像ソフトの開発	日本測器株式会社	525,000
	マイクロアクチュエータスキャニングソナーの開発	(株)神戸工業試験場	1,890,000
	船舶自動識別装置(AIS)の信頼性向上のための調査研	国土交通省海事局	2,417,746
	多視点での視界再現機構の基礎研究	(株)海洋総合技研	750,000
		小計	5,582,745
平成18年度	平成18年度水先区・強制水先区に関する調査	(社)日本パイロット協会	10,854,900
	次世代型接岸速度計に関する調査研究	古野電気(株)	1,050,000
	多視点での視界再現機構の基礎研究	(株)海洋総合技研	750,000
		小計	12,654,900
平成17年度	制限水域における操船に関する研究	内海水先人会	624,502
	制限水域における操船に関する研究2	内海水先人会	267,000
	小型船舶自動拡散型消火器の実践保存試験	テレサイトテック(株)	40,000
	レーダ映像発生アルゴリズムの開発	(株)海洋総合技研	600,000
		小計	1,531,502
平成16年度	制限水域における操船に関する研究	内海水先人会	4,000,000
	制限水域における操船に関する研究2	内海水先人会	1,800,000
	太陽光発電システムの性能評価調査研究	(株)MTI	260,000
	レーダ映像発生アルゴリズムの開発	(株)海洋総合技研	520,000
	小型船舶自動拡散型消火器の実践保存試験	テレサイトテック(株)	80,000
		小計	6,660,000

2.3 その他の共同研究

海技大学校が単独で行う研究に加えて、多くの研究テーマは他の研究機関に所属する研究者と共同で実施し、研究活動の活性化が図られた。表-2 - 2 に一般研究で海技大学校の職員以外の共同研究者が所属する機関名と研究テーマ件数を示す。

表-2 - 2 共同研究者の所属機関

	分類と機関名称	テーマ件数
教育機関	神戸大学海事科学部	2
	岡山大学理学部	1
	大島商船高専	1
	広島商船高専	1
	茨城大学	1
企業	日立造船	1

3 予算の使用実績

限られた予算の中で計画した研究による効果的な成果を得るために、テーマごとに見込まれる発表成果のレベルを表-3 に示す通り分類し、同表に示す予算限度額以内で必要経費

の申請を行い、さらに海大全体の予算計画で提示された研究費に収まるように修正しテーマ別予算配分が決定された。19年度当初は各申請の約2割の減額になった。表-4 予算配分に対し、予算使用実績割合を示す。

表-3 テーマ当り予算要求限度額

発表レベル	説明	予算限度額(1テーマ当り)
1	査読付学会誌論文発表	80万円以下
2	国際学会講演発表	70万円以下
3	国内学会講演発表	60万円以下
4	海技大学校研究報告	40万円以下

注) 論文発表で1st著者以外は全てレベル4として扱う

表-4 平成19年度 重点研究及び一般研究予算実績

研究番号		代表者	予算使用率
A06-001	船舶運航におけるOJTに関する研究	航海科長	93%
A06-002	SMS・ETM船員教育訓練の研究	機関科長	92%
05-004-2	船用機関士の手続き的知識獲得に関する研究	池西憲治	100%
05-005-2	船用機関士に対する効果的なチーム訓練方法に関する研究	近藤宏一	109%
06-001	GPSマルチパス波を応用した計測に関する研究	奥田成幸	115%
06-002	救命いかだのぎ装品の有効性に関する実験的研究	山本一誠	76%
06-003	LNG船の水処理システムの研究	伊丹良治	90%
06-006	船用クレーンのケーブル配置に関する研究	前田潔	78%
06-008	将来の日本海事教育システムについての研究	引間俊雄	86%
06-009	英語を学習する船員の国際性と多文化性の教育に関する研究	田中賢司	100%
07-001-1	船舶接岸速度計の性能要件に関する研究	新井康夫	93%
07-002-1	自動ボイラ制御の教育訓練用補助ボイラシミュレータの研究	伊丹良治	92%
07-003-1	操船におけるAIS情報の活用に関する研究	堀晶彦	100%
07-004-1	閉水域における船舶運航に係わる海洋環境に関する研究	藤谷達也	100%
07-005-1	ディーゼル主機遠隔操縦シミュレータを用いた訓練手法の研究	佐藤圭司	99%
07-006-1	海難の統計的特性に基づく事故評価に関する基礎研究-	長畑司	98%
07-007-1	船舶管理システムの効果的教育手法の研究	城戸八郎	103%

表 - 5 に、 予算使用率別のテーマ件数を示す。

表-5 予算使用率別テーマ件数

予算使用率	件数
100%超 120%以下	2
80%超 100%以下	13
60%超 80%以下	2
60%以下	0
合計	17

2.4 研究成果の発表予定と実績

研究成果はそれぞれの研究者が所属する学会等の論文誌、講演会等で発表された。その内訳を表-6に示す。同表には研究計画書に記載された発表予定についても記載した。個々の発表について研究成果の内容(要旨)とともに海技大学のホームページで公開した。

表 - 6 平成19年度研究発表実績

研究番号	分類	研究テーマ名(一部省略)	代表者	終了/継続	計画	実績
A06-001	重点研究	船舶運航におけるOJTに関する研究	航海科長	継続		L4 L4 L4 L4
A06-002	重点研究	SMS・ETM船員教育訓練の研究	機関科長	継続		
05-004-2	E	船用機関士の手続き的知識獲得に関する研究	池西憲治	終了	L2 L3	L3 L3
05-005-2	E	船用機関士に対する効果的なチーム訓練方法に関する研究	近藤宏一	終了	L2 L3	L2 L2 L4
06-001	A	GPSマルチパス波を応用した計測に関する研究	奥田成幸	継続	L1 L2	L1
06-002	C	救命いかだのぎ装品の有効性に関する実験的研究	山本一誠	継続		
06-003	B	LNG船の水処理システムの研究	伊丹良治	継続	L3	L4 L4
06-006	B	船用クレーンのケーブル配置に関する研究	前田潔	継続	L3	
06-008	E	将来の日本海事教育システムについての研究	引間俊雄	継続	L2 L3	
06-009	EFG	英語を子音する船員の国際性・多文化性の教育に関する研究	田中賢司	継続	L1	L2 L4
07-001-1	A	船舶接岸速度計の性能要件に関する研究	新井康夫	新規	L1	L1
07-002-1	E	自動ボイラ制御の教育訓練用補助ボイラシミュレータの研究	伊丹良治	新規	L2	L2 L3
07-003-1	A	操船におけるAIS情報の活用に関する研究	堀晶彦	新規	L1	L1
07-004-1	D	閉水域における船舶運航に係わる海洋環境に関する研究	藤谷達也	新規	L3	L2 L3
07-005-1	E	ディーゼル主機遠隔操縦シミュレータを用いた訓練手法の研究	佐藤圭司	新規	L2	L2
07-006-1	C	海難の統計的特性に基づく事故評価に関する基礎研究	長畑司	新規	L4	L4
07-007-1	E	船舶管理システムの効果的的教育手法の研究	城戸八郎	新規	L2	L2

次に表6 - 2 に研究数の内訳を記す。

	レベル	計画	発表実績
査読付き学術論文	L1	5	2
国際会議発表	L2	7	7
国内学会発表	L3	6	4
研究報告	L4	1	9

3. 研究業務の事後評価

3.1 自己評価および教室評価

各テーマの研究代表者から研究報告書により自己評価が以下のフォームに基づいて提出された。

(1)及び(2)については、次の4段階評価を行い、評価C又はDの場合にはその理由も記述する。

(1) 教官研究テーマ申請書に記載された実施項目に対する進捗度	計画した研究実施項目に対する進ちょく状況を評点*で自己採点する。評点がC又はDの場合にはその理由を記載する。
(2) 教官研究テーマ申請書に記載された研究成果の発表計画に対する実績	計画した成果発表に対して実際に行った発表の割合を(1)と同じ評点で自己採点する。C又はDの場合にはその理由を記載する。
(3) 船員教育・船舶運航技術の向上への寄与	研究成果が船員教育及び船舶運航技術の向上のために、どのように、どれくらい寄与したか、又は貢献する可能性について記述する。
(4) 研究成果の船員教育への反映	研究成果、研究の過程で得られた知識、技術、ノウハウ等が、どのように海大での授業、実習など、学生の教育に反映された、又は利用されたのか、若しくはその可能性について記述する。
(5) 予算計画の妥当性	研究業績の予算使用実績(%)が115%を超えた場合、及び65%未満の場合には、計画と実績が食い違った理由を記載する。

A:計画した実施項目全て、または計画以上の項目を完了した

B:計画した実施項目の2/3以上を完了した

C:計画した実施項目の1/3以上を完了した

D:計画した実施項目の1/3に達しなかった

(3)及び(4)は記述する(A,B,C,Dの記入は必要ない)

(5)は予算に対する使用額が65%未満または115%を超える場合に、その理由を記述する。それ以外は記入の必要なし。

また、教室評価は以下に示すフォームにより、研究者本人、研究者が所属する教室の科長及び同教室の研究管理委員会委員の三者が協議の上、3段階(A、B、C)の評点がつけられた。

評価項目	評点

(1) 研究者本人の自己評価の内容が妥当であるか	
(2) 海大で行う研究としてふさわしいものであるのかどうか	
(3) 研究内容が船員教育・船舶運航技術の向上のために貢献しているのか(将来も含めて)	
(4) 予算が有効活用されたか	
(5) 海大の設備が有効活用されているのか	
(6) 研究成果が海大での授業等、教育面に反映されているか(将来も含めて)	
(7) 研究成果の発表等をとおして社会に貢献しているか(将来も含めて)	

* A、B、Cはそれぞれの項目に相当する3段階評価(以下を参考に記入する)

(1) A:ほとんどの自己評価の項目について妥当である、B:おおむね妥当である、C:やや妥当とはいえない

(2) A:海大が行う研究として極めて適切なテーマである、B:おおむね適当である、C:指針で示す範囲の研究であるがやや適合しない面がある。

(3) A:極めて貢献している、B:おおむね貢献している、C:工夫次第では貢献できる。

(4) A:予算要求見積もりが適切であり、かつ使用金額に対して成果が大きい、B:予算見積もりにやや不適切又は使用した金額に対して成果がやや少ない、C:予算見積もりがやや不適切でかつ使用金額に対して成果がやや少ない。

(5) A:海大の設備等が非常によく活用された研究である、B:おおむね活用された研究である、C:あまり活用された研究とは言えない。

(6) A:研究成果が授業、実習等を通して学生の教育によく反映された(される)研究である、B:おおむね反映された(される)研究である、C:工夫次第では反映される研究である。

(7) A:成果を学会等の発表を通して海運界等の社会に非常に貢献した研究である。B:今後の成果が貢献する可能性が十分にある研究である、C:工夫次第では貢献する研究である。

以下の表-7に研究者本人評価(記述式を除く)と教室評価結果の集計表を示す。

表7 教室評価結果

研究番号	研究テーマ名(一部省略)	代表者	自己評価		教室評価							
			進捗度	発表実績	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	
A06-001	船舶自動舵におけるOJTに関する研究	航海科長	B	B	A	A	A	A	A	A	A	A
A06-002	SMS・ETM船員教育訓練の研究	機務科長	B	B	A	A	A	A	A	A	A	B
05-004-2	船用機関士の手続き的知識習得に関する研究	池田嘉台	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A
05-005-2	船用機関士に対する効果的なチーム訓練方法に関する研究	近藤宏一	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
06-001	GPSマルチパス波を応用した位置測に関する研究	奥田成彦	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
06-002	救命用救命装置の有効性に関する実証研究	山本一誠	B	D	A	A	A	B	A	A	A	A
06-003	LNG船の水処理システムの研究	伊丹良台	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
06-006	船用クレーンのケーブル配置に関する研究	前田繁	B	B	A	A	A	A	A	A	A	B
06-008	将来の日本海事教育システムについての研究	引間鐵雄	B	B	A	A	A	A	A	A	A	B
06-009	英語を学習する船員の国際生と多文化生との教育に関する研究	田中賢司	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
07-001-1	船舶保安装置の性能要件に関する研究	新井康夫	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
07-002-1	自動操縦装置の教育訓練用ソフトウェアシミュレータの研究	伊丹良台	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
07-003-1	操縦におけるAI搭載の活用に関する研究	堀田彦彦	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
07-004-1	閉水域における船舶自動舵に関する海軍実証に関する研究	藤谷重也	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
07-005-1	ディーゼル機関用燃費シミュレータを用いた訓練手法の研究	佐藤圭司	B	B	B	A	A	A	A	A	A	A
07-006-1	海軍の航海士育成に基づく事後評価に関する基礎研究	長岡司	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
07-007-1	船舶管理システムの効果的教教育手法の研究	城戸一郎	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A

3.2 全体評価

3.2.1 組織的な研究計画の策定が行われたか

平成19年度研究業務は、年度当初に作成された「平成19年度海技大学校研究計画書」に基づき実施されているが、同計画書は前年度末に研究テーマを募り、研究者の所属する各教室でテーマの重複等のチェックを行った上、研究管理委員会で予算等の調整を行い原案を作成し教官会議での審議・了承を経て理事会で承認されたものである。手続き的には以下の規程又は指針に基づいて行われたものである。

- (1) 独立行政法人海技大学校研究管理委員会規程
- (2) 独立行政法人海技大学校研究業務規程
- (3) 海技大学校における組織的研究のあり方等についての指針

3.2.2 共同研究を行い研究活動が活性化されたか

1.2 共同研究の項で示したように19年度は他機関との正式契約による共同研究が2件行われた。また、契約は取り結んでいないが他大学との共同研究5件、企業との共同研究1件が行われた。

3.2.3 研究に対する自己評価体制が構築され、かつ自己評価が適切に行われたか

研究業務の評価について、「海技大学校における組織的研究のあり方等についての指針」及び「独立行政法人海技大学校研究業務評価要領」に基づき、(1)研究者本人による自己評価、(2)教室レベルで行う教室評価、(3)研究管理委員会が行う全体評価の3段階で、研究計画書に記載された研究の目的、実施項目、予算及び期待される効果に対して、実際に行った研究によるこれらの達成度を客観的にかつ公平に海技大学校が自己(内部)評価する体制を確立した。本報告書はこれをまとめたものである。

また、平成14年度から開始された重点研究については、その計画段階から事前評価を行う体制を確立している。

3.2.4 研究成果の船員教育への反映は行われたか

研究活動を通して研究者本人が船舶運航の高度な技術、安全で効率的な運航のための知識を深めることにより、それぞれの教育業務(授業、実習等)の中で、学生の知識及び技術向上に寄与している。

3.2.5 成果の発表(論文、学会発表)実績が目標を達成したか

平成19年度に計画した成果の発表目標(年次計画:5件程度の論文発表あるいは国際会議発表と5件程度の国内学会発表)に対して、2.4の「研究成果の発表実績」の表-6に示す通り、合計23件の成果発表を行った。これらのうち、学術誌論文の2件及び国際会議発表の8件の合計10件が目標で挙げた論文発表に相当し、目標は達せられた。

3.2.6 研究成果をHP等で公表したか

インターネット上で公開している「海技大学校ホームページ(<http://www.mtc.ac.jp>)」の「研究計画/成果」のページ上の「平成19年度研究成果発表リスト」として以下の項目について公開している。

- (1)表題(和文・英文)
- (2)著者
- (3)発表学会誌名、発表学会名
- (4)概要

なお、これらのリストを見た外部の研究者又は一般の人から論文本体の閲覧の要望があれば、これに応えられる体制をとっている。

4. その他

4.1 学位の取得

平成19年度は次の1名が学位を取得した。

奥田成幸 博士(工学) 平成20年3月
「GPS衛星信号の海面による反射特性とその応用」

これに関する研究成果も他の研究成果と併せて示す。

説明

研究担当者欄の 印は研究の代表者を示す。

[研究実績欄]

(4) の発表実績欄のレベルを示す記号は以下の分類による

L1	学位論文、査読付学会論文誌発表
L2	国際学会講演発表
L3	国内学会講演発表
L4	海技大学校研究報告
(L4)	同上第 45 に掲載予定

[自己評価]

(1)及び(2)については、次の 4 段階評価を行い、評価 C 及び D の場合にはその理由も記述する。

評価点	評価
A	計画した実施項目全て、または計画以上の項目を完了した
B	計画した実施項目の 2/3 以上を完了した
C	計画した実施項目の 1/3 以上を完了した
D	計画した実施項目の 1/3 に達しなかった

(3)及び(4)は記述する(A,B,C,D の記入は必要ない)

(5)は予算に対する使用額が 65%未満または 115%を超える場合に、その理由を記述する。それ以外は記入の必要なし。

[教室評価]

A、B、C はそれぞれの項目に相当する 3 段階評価(以下を参考に記入する)

(8) A:ほとんどの自己評価の項目について妥当である、B:おおむね妥当である、C:やや妥当とはいえない

(9) A:海大が行う研究として極めて適切なテーマである、B:おおむね適当である、C:指針で示す範囲の研究であるがやや適合しない面がある。

(10) A:極めて貢献している、B:おおむね貢献している、C:工夫次第では貢献できる。

(11) A:予算要求見積もりが適切であり、かつ使用金額に対して成果が大きい、B:予算見積もりにやや不適切又は使用した金額に対して成果がやや少ない、C:予算見積もりがやや不適切でかつ使用金額に対して成果がやや少ない。

(12) A:海大の設備等が非常によく活用された研究である、B:おおむね活用された研究である、C:あまり活用された研究とは言えない。

(13) A:研究成果が授業、実習等を通して学生の教育によく反映された(される)研究である、B:おおむね反映された(される)研究である、C:工夫次第では反映される研究である。

A:成果を学会等の発表を通して海運界等の社会に非常に貢献した研究である、B:今後の成果が貢献する可能性が十分にある研究である、C:工夫次第では貢献する研究である。

19年度研究成果一覧を示す。

(注) 報告書提出後に報告を受けたものも含む。

* 査読付き論文・著書

- 1) 辰己公朗、久保田崇、藤井英信、河口信義、**新井康夫** (2008) アンケート調査に基づく船舶離着岸時における速力情報に関する研究 日本航海学会論文集 118 31-38)
- 2) **Akihiko Hori**, Effective Onboard Application on UAIS Information, Asia Navigation Conference 2007 (Tokyo)
- 3) **川崎真人、田中賢司、杉田和己** (2008) 新版 英和对訳 IMO 標準海事通信用語集 国土交通省海事局監修 成山堂

* 学位論文

- 1) **奥田成幸** (2008) GPSマルチパルス波を応用した計測に関する研究 神戸大学博士論文

* 国際会議発表

- 1) **Kenji Tanaka** (2007) Conrad and Noteworthy Japanese The Joseph Conrad Society UK Jul. 07 (London)
- 2) **Keiji Sato, Masayuki Ohnishi** (2007) Training Method on Main Engine Remote Control Simulator System The 8th International Conference on Engine Room Simulator Nov. 07 (Manila)
- 3) **KONDO Koichi** A STUDY ON LEARNING MATERIALS FOREFFECTIVE EDUCATIONAL TRAINING IN SIMULATED ENGINE ROOM The 8th International Conference on Engine Room Simulator Nov. 07 (Manila)
- 4) **Yosiharu Itami** Training Method using Simulator for PLC System in Auxiliary Boiler The 8th International Conference on Engine Room Simulator Nov. 07 (Manila)
- 5) **Noboru Nakamura, Tatsuya Fujitani, Osamu Okano** CHLORINE ISOTOPIC FRACTIONATIONS IN THE EARLY SOLAR SYSTEM: CORRELATION WITH OXYGEN AND STABLE CHROMIUM ISOTOPE ANOMALIES IN CHONDRITES Workshop on The Chronology of Meteorites and the Early Solar System Nov. 07 (Kauai)
- 6) **Hachiro Kido**, The study of the effective education technique of ship management system and the present conditions of the Japanese fleet management, Pacific 2008 International Maritime Conference

* 国内講演

- 1) 伊丹良治、LNG 船 10MPa 蒸気タービンプラントの水質管理について 第 76 回日本マリンエンジニアリング学術講演会 07 年 5 年 (東京海洋大)
- 2) 池西憲治、船用機関士の手続き的知識獲得に関する研究 日本教育工学会 第 23 回全国大会 07 年 9 月 (早大)
- 3) 藤谷達也、中村昇、岡野、木村真、TIMS による塩素同位体分析の現状とこれから、2007 年度日本地球化学会第 54 回年会 07 年 9 月 (岡山大)
- 4) 池西憲治、船用機関士の手続き的知識獲得に関する研究 第 77 回マリンエンジニアリング学術講演会 07 年 10 月 (神戸大)
- 5) 田中賢司、英語を学習する船員の国際性と多文化性の教育に関する一研究 ドッガー・バンク事件に関するコンラッドの著作について - 日本英文学会 関西支部 第 2 回大会 07 年 12 月 (大阪)

* 研究報告・技術資料等

- 1) 伊丹良治、他、年鑑 2006 年におけるマリンエンジニアリング技術の進歩 (2007)、日本マリンエンジニアリング学会誌 第 42 号、3-51.
- 2) 伊丹良治、技術資料 LNG 船 10MPa 蒸気タービンプラントの水質管理について (2007) 日本マリンエンジニアリング学会誌第 42 巻 6:15-18
- 3) 長畑司、海難船舶乗船者生存に関する自己完結性の一評価法と要救助海難に見るその傾向と特徴、海技大学校研究報告 第 51 号、1-22.
- 4) 田中賢司、コンラッドの日本への関心、海技大学校研究報告 第 51 号、23-42.
- 5) 西村常雄、増田憲司、岩崎裕行、品川史子、BRM 訓練に見るフェリー乗組員の行動と評価に関する考察海技大学校研究報告 第 51 号、43-48.
- 6) 北川哲男、浅木健司、山本一誠、田口幸雄、BRM の観点から見た航行の安全性向上過程に関する一考察- カーフェリーの航行実態調査の検証 -、海技大学校研究報告 第 51 号、49-62.
- 7) 田口幸雄、浅木健司、北川哲男、西村常雄、カーフェリーの航行安全チェックリストと危険度評価に関する提案 海技大学校研究報告 第 51 号、63-76.
- 8) 品川史子、岩元省吾、北川哲男、田口幸雄、増田憲司、海上実務経験の多寡による操船技能評価の比較に関する調査・研究 - 操船シミュレーションにおける自己評価と第三者評価について -、海技大学校研究報告 第 51 号、77-86.